



中村紀一先生のご退官にあたって

著者	辻中 豊
雑誌名	筑波法政
巻	38
ページ	3-6
発行年	2005-03-31
URL	http://hdl.handle.net/2241/00156201

中村紀一先生のご退官にあたって

二〇〇五年二月一七日、中村紀一先生の最終講義「戦後日本の『市民』問題―知的（共振）の挫折―」が行われた。学生とは異なり、そこに参集した多くの教員にとっては最初で最後の講義であった。そうしたことを慮って、その講義に先生は、資料集「最終講義ノート」を用意され、静かに、しかし情熱的に講義を行われた。そのノートは、先生のこれまでの研究内容を概観できるだけでなく、先生の人柄がすべて現れたような丁寧で、親切で、そして楽しくも知的好奇心溢れるノートであった。先生の、私には見慣れた直筆のレジュメが六葉そこに挟み込まれ、いくつかの興味深い分析図がやはり直筆で描かれていた。そしていくつかの資料とともに、先生の略歴や著作目録、そして折に触れて書かれた先生のエッセイがいくつか採録されていた。

ノートに含まれるエッセイのタイトルを拾ってみたい。「青春三昧―楳図球を追いかけていた頃」（社会学類長時代、コラム「私の学生時代」『つくばスチューデント』）、「続・青春三昧―ボランティアの暑い夏」（教育計画室長時代、コラム「私の学生時代」『つくばスチューデント』）、「卒論一年 初めて「マス目病」にかかった時」（着任2年後、「私の卒業論文」『筑波大学新聞』一九八八年）、エッセイ（第一学群長時代）、「ボクラは中年断定団」（『新しい学生生活を送るためにフレッシュマンセミナー参考資料集一九九二』）、「僕の好きな先生―忘れられない受講体験」『マンガと政治学』（一九九一年）。

どのエッセイも先生の経験、歩み、社会観・歴史観、そして先生の瑞々しい感受性が、押し付けでなく、そっと心に染み入ってくる小品ばかりであった。

そして多くの教員は、こうした温かみある講義としつかりと揺ぎない指針をもった教鞭に接することができた学生達を、半ば羨望をもって眺めるとともに、筑波大学において先生のご退官の持つ大きな意味に考え至り、改めて深い悲しみが講義室に静かに広がっていった。

・・・

中村紀一先生が、筑波大学社会科学系に行政学担当の教授として赴任されたのは、一九八六年秋のことである。先生はその時から、いわばずっと青年のような教授でありつづけ現在に至るのである。筆者は同じ秋、一と月半遅れで赴任したので、今も変わらぬ先生の若々しい姿を昨日のように思い出すことができる。

中村先生は、一九四一年六月に横浜に生を受けられ、一九六六年国際基督教大学大学院を修了、東京市政調査会研究員をへて、一九七一年千葉大学講師、七四年同助教授、そして八二年同教授となり、八六年筑波大学に移動されたのである。それ以来、学部（第一学群社会学類）、大学院（社会科学研究科、現人文社会科学研究科 社会学専攻ならびに現代文化・公共政策専攻）などで精力的に教育に携わってこられた。

先生の一つ一つの講義は、先のエッセイたちと同様、よく準備され心のこもったものであり、一見何気ない言葉や図、例示のなかに深い洞察が込められていた。こうした教育への真摯さは、先生に接した筑波大学や大学院の卒業生、そして我々教員に大きな感銘を与えると同時に、彼ら、私たちの生き方にとっても生涯の財産になるものであった。筆者も、そしてタジキスタンで亡くなった秋野豊氏（元社会科学系教員、先生とはラクビー愛好の仲間）も社会科学系の事務室の談話コーナーでお茶を飲みながら、先生から色々なことを教わったものである。

先生は同時に、政治と行政の静かな実践者でもあった。

赴任五年足らずの一九九一年四月から九三年三月までは第一学群社会学類長、一九九三年五月から九七年四月までは、筑波大学教育計画室長、一九九七年四月から翌九八年三月までは社会科学系長、二〇〇〇年四月から二〇〇一年三月までは筑波大学第一学群長、と筑波大学在任中、合計八年に亘って、筑波大学の教育研究上の大学行政の要職を歴任された。こうした管理業務だけでなく、いかなる大学行政においても、教育や研究同様、先生は、丁寧な熱心にそして温厚に、仕事をこなされた。私たちは、特に先生の若い同輩へ労わりや配慮を忘れることはできない。

先生のご専門は、行政学、住民運動・住民自治であり、東京市政調査会での研究を皮切りに、後掲のように住民運動、市民運動、市民と市政、住民・市民と議会、住民参加、広報・公聴、行政管理、地域社会、地方分権など多くの領域で、優れた論文を執筆された。現在でも住民運動や公聴を中心とした地方行政の分野での先生の業績は多く引用され、最も重要な研究として学界で高く評価されている。ちなみに先生は「住民運動」論者である点に特徴がある。

先生は学外でも、多くの活動を遂行されたが、特に先生のご専門を体現したものとして、いくつかの市での情報公開制度懇談会の座長の仕事や「つくば市オンブズマン」（初代、二〇〇二年以降、現在）がある。こうした先生

の仕事も、教育・研究同様に細かい配慮と鋭い洞察に満ちたものであった。

先生が筑波大学社会科学系を去られる今年、大学は法人化一年を経て、なお激動の最中にある。社会科学系政治学専攻や法学専攻自体は存続しているものの、政治学専攻教員の所属は、昨年、法人化とともに、大学院に、人文社会科学研究科 現代文化・公共政策専攻と同 国際政治経済学専攻に移行した。第二学群社会学類も、再編成の渦中に入りつつある。こうした大変動を、私たちは、政治学専攻の重鎮であり、温和な指導者である中村紀一先生なしで乗り切っていかねばならないのである。私たちとしては、先生のご教育、研究、行政、社会貢献での遺産を継承し、発展することを誓うのみである。

先生は、これからもつくば市オンブズマンを続けられると聞いている。つくば市オンブズマン事務所に来られる折には筑波大学に立ち寄りご指導頂けることを、私だけでなくすべての筑波大学教員は願っている。先生のご研究と社会貢献活動の一層のご発展と心から祈念する次第である。

二〇〇五年三月

筑波大学社会科学系 政治学専攻教員を代表して

辻 中 豊